

(道徳)

「豊かな学び合いを通して、よりよい生き方を見つめる道徳科の学習」

—自らの考えを広げ・深める指導法の工夫—

大阪市立中央小学校 上里佳代・天田有香・宇佐崎由衣

村山 梓・井上友里・濱寄歩美

1. 研究主題設定の理由

本校は「心身ともにたくましく、自らすすんで学ぶ、心豊かな子どもを育てる」を学校教育目標として掲げ、「考える子・やさしい子・がんばりぬく子」を目指す子ども像として、「学び合う・認め合う・つなぎ合う」ことを大切にした教育活動を展開している。

研究においても、主体的・協同的に学び合う力を身につけた子どもの育成を目指し、ピア・サポート活動や協同学習に取り組んできた。その結果、一人一人が大切にされ、安心して学びに向かい、仲間とともに楽しんで課題解決をすることができている。さらに、教科を絞り授業研究を行うことで、教科の特質を踏まえた指導の在り方や子ども育成を追究することができると考え、「特別の教科 道徳」に取り組むこととした。また、学習指導要領改訂による教科化に加え、これまでの本校の研究が、道徳科で大切にしたいこと「考えに至る自己の内面に目を向けること」「人間理解や他者理解をすること」「多面的・多角的な視点から考え続けること」に生かされると考えたからである。

そこで、研究主題を「豊かな学び合いを通して、よりよい生き方を見つめる道徳科の授業」とし、指導法の工夫によって、一人一人が自分なりの考えをもち、仲間とともに学び合うなかで、共によりよく生きようとする豊かな心を育むことにした。

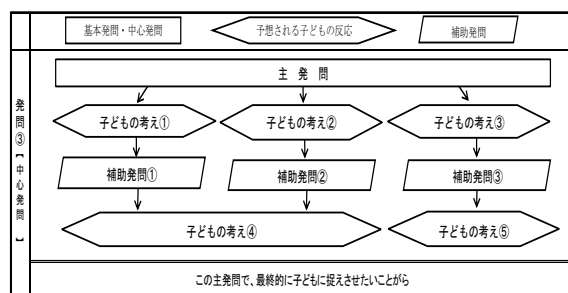
2. 研究の概要

研究主題に迫るため、3つの柱を設定した。研究の柱Ⅰは「子どもたちが自ら考え、自分自身を振り返る道徳科の授業」である。1～6学年と特別支援学級の7本の授業研究を通して、以下に示す3つの視点で指導の在り方を検証していくことにした。また、研究の柱Ⅱ「学校の教育活動全体（ピア・サポート、協同学習、なかよしタイム、人権教育など）を通して行う道徳教育」や、研究の柱Ⅲ「相互授業参観、校内研修、資料整備による研究の共有化・活性化」でそれを支えるものとした。

視点① ねらいに迫る発問構成の工夫

子どもがねらいとする道徳的価値について自分との関わりで考え、多様な感じ方や考え方に合って学び合うことができるように、授業全体の発問構成を工夫する。

- 導入・展開・終末の各段階の役割を踏まえた学習活動を考える。
- 発問の種類を中心発問、基本発問、補助発問の3種類に分類して捉える。
- 発問意図を明確にする。
- フローチャート図を作成し、予想される児童の発言を多様に考えておく。
- 意図的な補助発問の活用で、主発問による子どもの反応を掘り下げたり、さらに考えを引き出したり深めたりする。



視点② 考えを深める対話の工夫

対話を「他者との対話・教材（道徳的価値）との対話・自己との対話」と捉え工夫する。

- 効果的な話し合いを1時間の展開のなかで工夫する。高学年の事例を2つ挙げる。
 - ・学級を二分した対話活動で立場を入れ替え、両方の立場に立って考えることを通して、心の葛藤を体験させる。
 - ・カードを活用した対話活動を通して、①自分の考えの整理、②他者の考えの視覚化、③自分の考えとの比較、④考えの深化、を図る。
- 話し合い過程や互いの考えが見える板書の工夫をする。
- 気持ちや心を視覚化する掲示物を効果的に活用する。
- 教材提示の工夫、書く活動の工夫、役割演技・動作化の工夫などを通して、自己対話を促進させ、考えが深められるようにする。

視点③ 評価の在り方

児童の学習状況や道徳性に係る成長の様子を見取り、各学年の授業研究において、記述式の評価文を作成し学びを深める。

- 1時間で達成可能な具体的なねらいを設定する。
- ねらいに即した「授業を通して高めたい児童の考え方」を4つの観点で明確にし、評価する。4つの観点は①道徳的諸価値について理解する、②自己を見つめる、③物事を多面的・多角的に考える、④自分の生き方についての考えを深めるとする。
- 見取りの方法は、道徳ノートやワークシートの記述、中心発問や役割演技などの発言、授業時の様子を、振り返りの記述文を中心に組み合わせ、評価する。

特別研究 特別支援学級における道徳科の授業

- 児童の語彙や理解力に合わせて、教材文を書き換え、紙芝居や漫画絵で提示する。
- T・Tによる授業や体験的な活動を取り入れる等、授業展開を工夫する。
- パフォーマンス評価を行い、表情やうなずき、指さし、視線を見取る。

3. 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

- フローチャート図を作成し、中心発問で迫りたい考えと補助発問を想定していたので、多様な考えに対応しながらねらいに迫ることができた。また、教材の特性や児童の実態に応じて様々な授業展開をすることが新鮮で豊かな学びにつながるとわかった。
- 対話の工夫（話し合いの形態や手段・動作化や役割演技、気持ちや心を視覚化する掲示物など）により、活発に話し合い、考えを広げ・深めることができた。
- 評価において、1時間で達成可能なねらいや4つの観点による評価で、児童の学習状況を的確に把握し、個々に応じた評価につなげることができた。指導者にとっても、評価への見通しをもつことができ、道徳科の目標の理解にもつなげることができた。

(2) 今後の課題

- 本気で「考え・話し合いたくなる」授業展開や中心発問を考えていく。
- とともに考え、話し合い、豊かな学び合いを支える学級力を高めていく。
- 評価において、児童の多様な学びの姿を見取るようにしていく。
- 評価を指導に生かし、道徳科の授業の充実を図るようにしていく。